

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	産業研究所
大項目	0 理念・目的
中項目	
小項目	0.0.1 大学・学部・研究科等の理念・目的は、適切に設定されているか。
要素	理念・目的の明確化 実績や資源からみた理念・目的の適切性 個性化への対応
小項目	0.0.2 大学・学部・研究科等の理念・目的が、大学構成員(教職員および学生)に周知され、社会に公表されているか。
要素	構成員に対する周知方法と有効性 社会への公表方法
小項目	0.0.3 大学・学部・研究科等の理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。
要素	

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 学内教員を核とした共同研究を常時3プロジェクト設置し、加えて毎年臨時的プロジェクトを1つ以上運営する。	→各研究プロジェクトの定例研究会のうち公開型を2回以上開催する。終了後1年以内に研究成果の公刊。	A	A	B	B	B
2. 常時運営する3つの共同研究のテーマは、いずれも国際性、あるいは地域連携と結びついた内容とする。	→プロジェクトは国際性か社会連携性のあるテーマ設定とそれにふさわしいメンバー(学外者を必須)を編成。	A	A	A	A	A
3. EUインスティテュート関西事業、EU情報センター活動、および日中経済シンポジウムを毎年運営する。	→産業研究所の運営するEUIJ関西シンポジウム、日中経済シンポジウムを毎年各1回以上開催。	A	A	A	A	A
4. 産業研究所の共同研究活動の成果は、毎年出版物として公刊するのみでなく、講演会で教育活動や社会に還元する。	→学外公開型講演会・セミナーを年10回以上開催。東京での講演会を毎年開催し、首都圏での学術情報発信を行う。	B	A	A	B	B
5. 経済・産業学術情報データベースを維持・更新して、研究者、学生に利用(検索)提供し、研究活動に寄与する。	→データベースに、毎年8千件以上の論文記事データの追加入力。	A	A	A	A	A

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 毎年、研究所運営委員会で所長、教員を中心としてプロジェクトの新規設置を提案、研究所活動の活性化促進に取り組んだ。研究成果として叢書を刊行(毎年1冊)、研究会は内容によって一般公開とし、EUIJ関西、新聞社、経済団体との共催する場合もあり、毎年実施(16回)。公開した講演会、シンポジウム等は報告書を編集し出版(3冊)、もしくはホームページで公開。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 共同研究の成果として『ビジネス・イノベーション・システム』『EU統合の深化』『関西経済の構造と景気指数』『アジアにおける市場性と産業競争力』『日本の国際開発援助事業』を刊行。報告書の出版、さらにEUIJ関西経営学グループの研究活動として『EU経済の進展と企業・経営』の編集にも携わり学外へ成果を発信することができた。『生産性の現代的意義』では学部講義を通し学生へも成果を還元できた。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か プロジェクトの性格上、研究員に限定した研究会を開催する必要性もあり、公開型と研究会の調整を図る必要がある。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標2	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 産業研究所は、学際的、実証的、総合的なアプローチにより現実的な課題研究を行うことを目標しており、それに沿って研究テーマを選択している。なお、研究プロジェクトメンバーには実務家も含まれており、大所高所からの視野で取り組んでいる。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 研究の主題は「企業と経済の日・EU比較」「関西経済と景気循環指数に関する総合的研究」「日本の国際開発援助事業」「生産性の現代的意義」「アセアンの経済共同体の成立—EUとの比較」と多岐にわたり、関経連、関西生産性本部、国際協力機構、JETROなど、地域や産業経済界、国際社会との連携を視野に入れた研究を行った。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 主として地域経済、国際社会の観点から研究テーマを選択し広く社会へ還元できる研究成果を発表する。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標3	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか EUIJ関西を構成するコンソーシアムの各大学と協力しシンポジウム事業を展開、日中シンポにおいては吉林大学および学内部局との連携をとりながら事業を実施した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か EUIJ関西シンポは2009、2010、2011、2012年度 日中シンポは2009年、2010(中国)、2011、2012年度、同シンポの記録について2013年度に関学大出版から刊行、それ以外に目標設定当時には企画に上がっていなかった新聞社等との連携シンポを2011、2012年度に実施、いずれもシンポジウムの内容をまとめてレクチャーシリーズとして刊行した。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か EUIJ関西をはじめとする学外団体並びに経済団体等との連携によるシンポジウムやセミナーの開催を積極的に行う。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆

目標4	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 学内で一般公開している講演会の後援、共催を積極的に行った。また、学外でも『新関西国際空港キックオフシンポジウム「アジア交流・新時代の到来」』(産研新聞社との共催、国土交通局・経済産業局近畿経済産業局・大阪府・大阪市・関経連・大阪商工会議所等後援)『日中経済シンポジウム』『日中経済社会発展フォーラム』(毎日新聞社等との共催、関経連等後援)を実施。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 共催、後援を含めると上ヶ原において2009～2013年毎年19～29回、東京開催分は1～3回開催することができた。なお、東日本大震災等の諸事情により首都圏での公開型講演会は一時期実施を控えていた側面がある。また、『新関西国際空港キックオフシンポジウム』『日中経済シンポジウム』『日中経済社会発展フォーラム』は産経新聞、毎日新聞紙上で特集記事を掲載、さらに報告書を刊行し一般に成果を還元した。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後も引き続き学外公開型セッションを企画開催し研究成果を学外へ公表、発信する。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標5	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 研究所が収集する雑誌資料を中心に論文記事データ更新を年6回、それに合わせて記事のレビュー執筆を学内教員に依頼し原稿を研究所ホームページで配信、公開した。データ更新については研究所内で行い、レビュー記事執筆に関しては所長、研究所教員も協力して行った。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2009年より毎年9,400件～10,600件のデータを入力。検索対象データを毎年更新。学生への利用に供した。学生のレポート、卒論作成の質を維持し、情報リテラシーの基本を学ぶことができるツールとして活用されている。教員学生への利用案内を再編し学内への周知を図った。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 研究所で収集する最新の雑誌利用に関して利便を図れるよう、研究所内での資料保管体制を改善する必要がある。また、学部開講科目の課題レポート等とタイアップしてデータベース活用をより一層浸透させていく。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
備考			☆